

エネルギー表示法による溶解度の計算、 および光毒性予測/VCDによる構造決定

古賀 良太

株式会社クロスアビリティ 代表取締役

rkoga@x-ability.jp

<u>共同研究者:</u>

エネルギー表示法: 松林伸幸、櫻庭俊(京都大学)

光毒性予測/VCD(計算、ソフト開発): 山口徹(TSテクノロジー) 、古川祐貴(クロスアビリティ)、安田耕二(名古屋大学)

2012年1月17日 第323回CBI学会研究講演会



エネルギー表示法(ER)

- 京都大学・松林准教授が2000年に考案した高速 な自由エネルギー計算手法。 応用論文あり
- 2011年10月から弊社と北浦教授によるJST(A-STEP)『フラグメント分子軌道法を中核とした量子 創薬計算システムの構築』で共同研究中。

• GAMESS FMO-Amber-ERのAmber-ERのI/Fを開発

- 光毒性予測/VCD
 - 某社のブラインドテストを契機として、弊社開発 のGPGPU QMが活用できる分野であると考えて いる。 <mark>応用論文なし</mark>
 - 本発表は背景と現状説明



『創薬段階における物性評価の重要性』

- 日薬理誌 (Folia Pharmacol. Jpn.) 127, 213-216(2006)
- 薬理活性の増強だけに注力して探索研究を進めてしまうと、化合物特性に物性情報を反映させるような展開が困難。
- 迅速な溶解性評価がほしい。計算時間かかると意味がないのでlogP(cheminfoがベター)
 - 迅速な溶解性評価と分配係数logDによる経口吸収性の脂溶性が必要とされる
 - 精査段階で結晶からの溶解度が極めて低くなる場合がある
 - 結晶性や結晶形を収集することが重要で、結晶多形の事前評価が 望まれる

※面による速度論の違いもあり平衡論だけでは難しい









cytochrome c 系の水和解析

X-Ability solute: horse heart cytochrome *c* (1HRC), 104 residues and heme, 1748 atoms, total charge of +7 solvent: 20000 water molecules (TIP3P) temperature: 300K







タンパク質の水和自由エネルギー解析が全原子レベルで可能に



「溶質」「溶媒」「溶媒和」概念の拡張 ~統一的な概念構成に向けて

「溶媒」=溶液系に最初からあるもの 「溶質」=溶液系に後から入ったもの





溶液理論構成の要件

▶ 内部自由度のある分子



- 気体様低密度(1対1の「結合」)から 液体様高密度領域をカバー
- ▶ 量子論との結合(QM/MM法)
- ▶ 非物理的挙動を導かないような数学的に堅牢な定式化

エネルギー表示溶液理論の構成

統計平均

★ X-Ability → A DiaTEUFT スナップショット配置における2体 エネルギー分布(ヒストグラム)

 $\hat{\rho}^{e}(\varepsilon) = \sum \delta(\varepsilon - v(\psi, \mathbf{x}_{i}))$

ψ: 溶質の座標
 x_i: i番目の溶媒分子の座標
 v(y,x): 溶質-溶媒間の2体相互作用
 ε: 2体エネルギー値(分布関数の横軸)

- ✓ 同じ溶質−溶媒相互作用を持つ 配置(構造)をグループ化(射影)する
- ✓ どのような近似でも、同じ溶質 溶媒相互作用を

 ⁵ 0 ^{2体エネルギー}

 持つ配置(構造)が溶媒和自由エネルギーに

 同じ重みで効くという統計力学の原理を破らない ⇒ 精度の高い計算

✓ どのようなポテンシャル関数に対しても1次元の座標 ⇒ 計算スピード向上

- ✓ 溶質および溶媒分子が、共に、全体として1つのものとして扱われる
 ⇒ 内部自由度 ⇒ 外場 ⇒ 不均一系・QM/MM系
 ⇒ 低密度/濃度極限 ⇒ 超臨界流体・混合溶媒
- ✓ DFT(密度汎関数理論)的な理論構成 ⇒ 系統的定式化

溶媒和自由エネルギー $\Delta \mu = -k_B T \log \left\langle \exp\left(-\beta \int d\varepsilon \, \varepsilon \hat{\rho}^e(\varepsilon) \right) \right\rangle_{\text{reference solvent}}$







結合寿命も評価可能

- 疎水性溶質の分布は、ミセル中でより局所的
- ミセル・膜内部と水領域での、溶質の安定性の逆転





ERのまとめ

- Gromacs NAMDに対応、Amberは対応中
 - GUIはフィアラックス社のMF Amberに移植予定
- 利点(積分方程式主体のRISMと比べて)
 - 自由エネルギーが定量的に計算できる。
 - 量子化学計算を用いた場合、電子雲を部分電荷に落とさず、電子雲のまま適用できる。
 - 分子間サイトの関係がexplicitな構造座標として表す必要がないので、サイト間の相互作用の近似が不要で、rigidでも溶質flexibleでもどちらでもよい。また、均一系であるか不均一系であるかを問わないので生体膜や界面活性剤にも適用できる。



MM-ERの評価(1): 概要

C1の溶媒和自由エネルギー (GAFF、溶質flexible、 Tip4p/amber99sb)

 $:-22.2422\pm0.1073$ kcal/mol

※計算時間は1化合物4コアで 4~5時間程度(5割がMD)

<u>十分なサンプリングをしている</u>

①c1 + 1000water = 1ns, 10fs毎に snapshot ----> 10⁵ frames

②1000water = 10ps, 10fs毎に snapshot ----> 10³ frames

③c1単体 = 10ns, 10fs毎に snapshot ----> 10⁶ frames

<u>計算時間短縮は</u>溶質rigidにする、 サンプリングを必要最低限に減らす、 MD & ERをGPUで動かす etc



J.Chem.Inf.Model. 2011, 51, 69-82

MMPBSA -> ER

 $c1/1000water : -22.2422 \pm 0.1073$ $c^{2}/1000$ water : -22.4811 ± 0.1422 c3/1000water : -27.9471±0.2576 c4/1000water : -25.2569±0.1451 c5/1000 water : -39.5630 ± 0.3022 $c6/1000water : -33.8582 \pm 0.2325$ c7/1000water : -33.5672±0.2735 c8/1000water : -31.5105±0.1425 c9/1000water : -32.3265±0.2298 $c10/1000water: -4.1927 \pm 0.1029$ c11/1000water : -27.4158±0.1881 $c12/1000water : -32.0990 \pm 0.1704$ c13/1000water : -31.8347±0.2275 c14/1000water : -31.0157±0.1804 $c15/1000water: -37.2129 \pm 0.2295$ $c16/1000water : -31.3534 \pm 0.1880$ c17/1000water : -32.7385±0.1674 c18/1000water : -34.5272±0.2568 X-Ability חבקר MM-ERの評価(1): MM-ERとMM-PBSAとの比較

検証: MM-PBSAのsolvationをERに変更することで、結果は改善するか?



J. Chem. Inf. Model. 2011, 51, 69-82の PB部分をERに変更してプロット

J. Chem. Inf. Model. 2011, 51, 69-82

結果:MM-PBSAのsolvationをERに変更することで、結果は改善した 1.R2乗値は0.09から0.18に改善 2.実験的に結合自由エネルギーが上位3個の化合物の順位は、 MM-PBSAは5位、10位、12位、MM-ERは1位、9位、3位と改善している。



Winmostarでsdfファイル読込





Gromacs-ERのバッチ処理(前半)

#!/bin/bash

mpd acpype -i \$1.pdb -n \$2 cd ./\$1.acpype cp ../c1.acpype/water.xtc ../c1.acpype/water.log . cp ../c1.acpype/c1.mdp . mv c1.mdp \$1.mdp cp ../c1.acpype/c1w_*.mdp . cp ../c1.acpype/c1w.top . sed s/c1/\$1/g c1w.top > \$1w.top rm -f c1w.top mv c1w nvt.mdp \$1w nvt.mdp mv c1w_npt.mdp \$1w_npt.mdp mv c1w run.mdp \$1w run.mdp grompp -maxwarn 10 -f \$1.mdp -c \$1_GMX.gro -p \$1_GMX.top -o \$1.tpr mpiexec -I -n 4 mdrun -s \$1.tpr -c \$1.gro -x \$1.xtc -g \$1.log genbox -cp \$1_GMX.gro -box 3.2 3.2 3.2 -cs tip4p.gro -maxsol 1000 -o \$1w.gro -p \$1w.top grompp -f \$1w_nvt.mdp -c \$1w.gro -p \$1w.top -o \$1w_nvt.tpr mpiexec -I -n 4 mdrun -s \$1w_nvt.tpr -c \$1w_nvt.gro grompp -f \$1w_npt.mdp -c \$1w_nvt.gro -p \$1w.top -o \$1w_npt.tpr mpiexec -l -n 4 mdrun -s \$1w_npt.tpr -c \$1w_npt.gro grompp -f \$1w_run.mdp -c \$1w_npt.gro -p \$1w.top -o \$1w_run.tpr mpiexec -I -n 4 mdrun -s \$1w_run.tpr -c \$1w_run.gro -x \$1w_run.xtc -g \$1w_run.log 20



Gromacs-ERのバッチ処理(後半)

(前ページの続き、、、)

mpiexec -I -n 4 mdrun -s \$1w_run.tpr -c \$1w_run.gro -x \$1w_run.xtc -g \$1w_run.log # ../../tools/gromacs/gen_structure -l/opt/gromacs-4.5.3/share/top -t \$1w.top \$HOME/enerepr-0.1.214/tools/gromacs/gen_structure_2 -l/opt/gromacs-4.5.3/share/top -t \$1w.top \$1 cd soln \$HOME/enerepr-0.1.214/tools/gromacs/gen_input -x ../\$1w_run.xtc -log ../\$1w_run.log \$HOME/enerepr-0.1.214/ermod_gromacs cd ../refs \$HOME/enerepr-0.1.214/tools/gromacs/gen_input --traj ../water.xtc --log ../water.log --flexible ../\$1.xtc \$HOME/enerepr-0.1.214/ermod_gromacs cd ../ \$HOME/enerepr-0.1.214/slvfe > slvfe_\$1.log cd ../

※enereprは京大版ERソースコード(GPLで3月末公開予定)

X-Ability

MM-ERの評価(2): SAMPLのchlorideの評価

ethane calc

ethane expt



ethaneのみOPLS-AA





横軸:chlorideの数 縦軸: kcal/mol Gromacs 4.5.3、力場Amber-GAFF ※ethane単体(横軸0)だけOPLS-AA + R.E.DとGAMESS-USで電荷を決め ることで精度が改善した。 結果は、CIが無い場合に自由エネル ギーがプラスに出ており、その後、CIの 数にほぼ比例して更に増えていく。こ れに対して、実測ではCIの数への依存 性は小さい。



MM-ERを使ってみて

• MDをGromacsで行うことでトラジェクトリを得て、それを使い、複数のリガンド セットやSAMPL(オープンアイ社による溶媒和自由エネルギーコンテスト)の提供 化合物群を用いて、ERで溶媒和自由エネルギーを得た。

ΔΔGの比較のためレンジも違うし全うな評価はできないが、そもそも
 化合物/蛋白質間の相互作用のところで誤差があり、精度向上には限界があるので、MM-PBSAよりMM-ERの方が改善されたといえる。

SAMPLで活用したAmber-GAFFでは、Clが、単なる斥力源になっている。
 原因について。Amber-GAFFのLJパラメータの元になったOPLS-AAの
 Chlorobenzeneのパラメータを見ると、Clに非常に強い-0.180の電荷が付けられている(opls_264)。つまり、OPLS-AAでは、Clに強い負電荷を載せることを前提に設定したためLJが弱くなっており、そのままパラメータを持ち込んだので、
 電荷決定をRESPで行うAmberと噛み合っていないことが推測される。

力場の問題であり、ERの理論自体の問題によるものではない。



ERの 欠点

- FEPに比べて適用範囲が狭い
 - 現時点でリガンドバインディングはうまくいってない(サン プリングスキームの改善を検討中)
 - 現状、一番良い結果でR²=0.4程度
 - ρとρ₀が重なっていないと使えない(粗視化モデルとの融合により解決可能?)
- 溶媒和自由エネルギーしかやらない
- MDの欠点を改善するものではなく、引き継ぐ
 MDとの組み合わせによる計算手法である
- 理論がちょっと難しい
 - ただ、理論を理解しなくても使える



固体の溶解度

- 結晶多形の溶解をERをつかって計算できる かもしれないが、速度論の扱いが必要かもし れない。研究中。
- 低分子の溶解度よりも実用上では重要かもしれない。
- テラヘルツスペクトルと基準振動解析(量子 化学計算)の比較によるペレット(混合結晶)
 の構造予測が可能。



(以下、参考)テラヘルツ領域の分光

物質の分子間相互作用に由来する未開拓領域



11 企業1	★14版 【第三種郵便物認可】
を発した。「封書に麻薬が 歴されています」。理化学 「爆や覚せい剤などを 成も間近」と話す。	これ、 た半の物質をすり抜け、 た米の物質をすり抜け、 でいる、 の広いたの場果や高物の検 し始めた。爆果や高物の検 し始めた。爆果や高物の検 しられた、爆発や高物の検 したいた。爆発や高物の検 したいた。爆発や高物の検 したいた。爆発や高物の検 したいた。 場子の開発への応用が期待 支をはじめ、創築や水世代 またていり、 海外勢の注目を たまが世界のの分野でも正確に っており、 海外勢の注目を たまが世界のの分野でも に間を ため、 の分野でも に間を ため、 と吸い込まれ、 ため、 とした、 とした、 とした、 とした、 とした、 とした、 の分野でも に間を たります。 とした、 とした、 の分野でも に間を たり、 、 とした、 のた。 、 の 、 の 、 の にかすた。 、 の 、 の に、 の に、 の に、 の に、 の に、 の に、 の
、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、	
に 西沢潤一東北大学名誉動 通 一男へルツ波で医薬自らや 画沢潤一東北大学名誉動 超える化学物質を特定できる。 っこのデータと比較する の。このデータと比較する したで物質を特定できる。	Remementary Remementary (Northouse Remementary (Northouse Remementary (Northouse Remementary (Northouse Remementary (Northouse Remementary (Northouse Remementary (Northouse Remementary (Northouse Remementary (Northouse Remementary (Northouse Remementary (Northouse Remementary (Northouse Remementary (Northouse Remementary (Northouse Remementary (Northouse Remementary (Northouse Remementary) (Northouse Remementary (Northouse Remementary) (Northouse (Northouse Remementary) (Northouse (Nort
4 国防関係者から極秘に打診 の技術には世界が注目。同様氏は以前、テ しい」。伊藤氏は以前、テ しい」。伊藤氏は以前、テ の技術には世界が注目。同様 には世界が注目。同様の しい」。伊藤氏は、 の しい」。伊藤氏は、 の で 参加して米国の の 支 術には世界が注目。 の 支 術には世界が注目。 の 支 術には世界が注目。 の 支 術には世界が に り の 支 術の に の 支 術の に の 支 の 支 術の に の 支 の 支 術の に の う の 支 の の ち の う の 支 の の う の う の 支 の う の う の う の う の	・ 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、
キヤノン	、微量物質を特定
を蓄積し半導体の微細化の などの実現に不 ににわるに応用を目指す。 品質検査にに用るしたどの実現に不 の欠な窒化ガリウム基板の のに作るノウハウ も気化クイオード	期待たれこれを法に、 期待たれる用途は広い。 キャンノい出運研と徹底です。必要な お料は逆をの子方の配額に可 ネャンノの配額に可 たんばく慣もほんの少しあ たんだく慣もほんの少しあ たんだく慣もほんの少しあ たんだく慣もほんの少しあ たんだく慣もほんの少しあ たんだく慣もほんの少しあ たんだく慣もほんの少しあ
掲載します。	今が激してきた、 の応用も探る。肝臓でが していた、 の応用も探る。肝臓でが したがきいきたが、 してした、 を当め、 の応用も振る、 に常、 やし、 といた、 なり、 に、 なり、 の に、 の に、 の に、 に、 なり、 の に、 の に、 の に、 の に、 の に、 の に、 の に、 の

2008.4.18



テラヘルツ領域における基準振動解析



$\mathbf{X} \xrightarrow{\text{Ability}}_{2 \square \exists \mathcal{T} \not \vdash \forall \mathcal{T} \not i}$ テラヘルツ領域における基準振動解析





16.5 cm⁻¹



面外ずり 67.7



面外変角 28.4







非対象伸縮 63.6





面内伸縮/ 変角 109.4



★ X-Ability テラヘルツ領域における基準振動解析







面外ずり 67.7



面外変角 28.4



赤外領域の局所モード (アミノ基伸縮) 3905.5



非対象伸縮 63.6





面内伸縮/ 変角 109.4





既存手法の補完

分子間相互作用および構造解析で使われているサービス

- Biacore(表面プラズモン共鳴)
 相互作用強度、結合速度(ノンラベリング)
- プロテイン・チップ(マイクロアレイ)
 ハイブリダイゼーションの程度を蛍光強度で測定



• <u>リプレイス・補完例</u>

既存のデータベース、もしくは計算で構築する化合物情報データベースに基づき、テラヘルツスペクトルを入力として、相互作用部位の挙動、曲率計算(二次 微分)による相互作用強度計算、周辺環境情報を出力する。計算だけで安価。







光毒性予測/VCDによる構造決定

- 光毒性予測は第一励起エネルギー、VCDによる 構造決定はVCDスペクトルを計算する。
- 計算結果のコンフォメーション依存性が大きいために、多数のコンフォメーションを発生させ、最安定なコンフォメーションを見つける必要がある
- そのためには配座探索と<u>高速な量子化学計算</u>が
 不可欠である
- 計算化学の専門家ではなく、安全性・物性の専門 家が担当するケースも多く、windowsのUIを含め たユーザビリティが重要になる







光毒性もVCDもQMで同時計算可

- HOMO-LUMO Gapでdescriptorを扱う報告あり
 - 光毒性には第一励起エネルギーが関係している
 - 計算コストの観点から第一励起エネルギーと相
 関値の出るHOMO-LUMO Gapを採用
 - -ただ、圧倒的に第一励起状態はHOMO-LUMOから構成される化合物のみ有効

Journal of Molecular Structure: THEOCHEM 719 (2005) 191-200

第一励起エネルギーが最小コストで計算できるTDDFT計算が必要と考えているが、芳香族系炭化水素ならAM1-ZINDOがベター。



半経験的による励起エネルギー計算

 最も高速でそれなりなのはoptをAM1、励起エネル ギーをZINDOにする。Gaussianの入力例

%chk=temp.chk

#n AM1 Opt

--Link1–

%chk=temp.chk

#n ZINDO Geom=Check td=(nstates=5)

<u>※おそらくMOPACの方が高速</u>

 半経験的方法だとパラメータがない場合があるし、 あってもNa以降の原子を含む系では構造最適化の 精度もガクンと落ちる。



QMによる励起エネルギー計算 TDDFT計算(光毒性スクリーニング用ナミキライブラリの一部) # B3LYP/6-31G* td=(nstates=10)の第一励起エネルギー



4.5634(eV)

2.7711(eV)

3.7267(eV)

Journal of Molecular Structure: THEOCHEM 719 (2005) 191-200では、7.2±0.7 (eV)でHOMO-LUMO gapのdescriptorを作ったとあるので、励起エネルギーとの絶対値とはダイブ違う値。



VCDによる絶対構造推定の流れ





VCDによる絶対構造推定

 X線で絶対構造はわかるが、X線解析しづらい サンプルに対してVCDは有効

Gaussian社のウェブサイトに記述あり

http://www.gaussian.com/g_whitepap/vcd.htm

- 標準物質からの相対エナンチオマー純度の決定
- 絶対構造決定
- 溶液中の配座決定



Biotools社、VCD計測機



エナンチオマーとジアステレオマー

- エナンチオマー間でエネルギー差はない、
 VCDで区別するしかない。
- ジアステレオマーと幾何異性体(cis/trans)は エネルギー差がある。
- IRでジアステレオマー、VCDでエナンチオマー
 を区別するため、QMは有効だとGaussian社
 は言っている。

http://www.gaussian.com/g_whitepap/vcd.htm



某社のブラインドテスト(1)



構造リジッド

光学異性体毎にMOEのlow mode MDで発生した8種類の 配座を提供 上記のVCDスペクトルがどちら の光学異性体のものかを予想



(R)-1-[(4-cyanophenyl)(3-bromo-4-hydroxyphenyl)-methyl]-1H-[1,2,4]triazole



(S)-1-[(4-cyanophenyl) (3-bromo-4-hydroxyphenyl) -methyl]-1H-[1,2,4]triazole



下記計算でテスト(1)に合格

aromataseはrigidなので同じconfigurationの配座のvcd傾向は 一致しているとみて、sとrのsdfの中の最安定な配座のみ b3lyp/6-31g* freq=vcd一点計算したところ、1400cm⁻¹付近の ピークが明らかにr体とs体で逆。方向一致しているr体と判断。 J. Med. Chem., 2008, 51, 4226-4238





某社のブラインドテスト(2)

構造フレキシブル+tautomer





GT-2331 N3-H type 209 conformers

GT-2331 N1-H type 670 conformers

2種類のTautomerについてMOEのlow mode MDで配座を発生(合計879配座) それぞれのTautomerの存在確率は?



テスト(2)の問題

	Values	備考
Ei [kcal/mol]	0.8	相対エネルギー
E0 [kcal/mol]	0.0	相対エネルギー
Т [К]	298.15	温度
g [-]	1	状態数(singlet:g=1, triplet:g=3)
N(Ei)/N(E0)	0.258986383	存在比
kB [J/K]	1.381E-23	ボルツマン定数
Avog	6.02E+23	アボガドロ定数
ToJou	4.185851821	ジュール変換
	存在比	存在割合
N(E0)	1.000	79.4%
N(Ei)	0.259	20.6%

- 真空中の計算で構造決定して良いか? $\frac{N_i/g_i}{N_i/g_i} = \exp\left\{-\frac{e_i e_j}{k_BT}\right\}$
- 量子化学計算の精度で十分か?
 - エネルギー差・温度・状態数が分かれば存在比が計算で
 きる。0.8kcal/molの差で20%変わる。
 - よって、存在比をエネルギーから正確に議論する場合は、 1kcal/mol以下の精度が必要(hartreeで点6桁以上の精度)。doubleの計算が必要。



計算時間はかけられない

- 溶媒効果の計算は時間かかるので省きたい
- 構造最適化に時間がかかるから、できる限り
 エネルギーー点計算で済ませたい
- 励起エネルギーもCCSD/6-31G**くらいでちゃんと計算したいが無理
- ab initioコンフォメーションサーチするにしても、B3LYP/6-311G*くらいが限界と考えるべき



報告によると

• 下記論文では、実験値はN1:N3=65:35といっている。

Minick et al., Chirality, 19:731-740 (2007)

- 真空中の計算では90-95:5-10という報告あり de Vries AH, van Duijnen PT. Theoretica calculation of tautomer equilibria of 4-substituted imidazoles in the gas phase and in solution. Biophys Chem 1992;43:139 147.
 - だが、ダイブ古い計算の文献なので信用できない



※計算はTSテクノロジー社協力

1. 課題

GT-2331 N1-H typeとN3-H typeの存在比を推算



Optimized Structure at B2PLYP/6-31G*

Optimized Structure at B2PLYP/6-31G*



2. 準備

tautomer(互変異性体)の存在比計算で考えられる可能性

⇒ 今回のGT-2331はこのタイプ

・ 物質の平衡状態として互変異性体が存在している場合



tautomer間のエネルギー差を計算し、ボルツマン分布を計算することで、 存在比を推算できるかもしれない。

- 互変異性を起こさせるために何か化学的な操作(塩基を加える等)が必要な場合
 - ⇒ ケト-エノールなど 化学的な操作の過程(操作=反応過程の遷移状態)を計算、もしくは、 原料からの合成過程でtautomerが発生する過程の遷移状態を計算し、 その活性化エネルギー差を議論に加えなければならない。 (遷移状態の計算は非常に大変)

ボルツマン分布(分子iとjの比率)

$$\frac{N_i/g_i}{N_j/g_j} = \exp\left\{-\frac{e_i - e_j}{k_B T}\right\}$$

(e: 全エネルギー、g: 状態数、kB: ボルツマン定数、T: 温度)



3. 最もオーソドックスな手法(手法1)

手順

- 1.2D構造を参考に、3D構造を作成
- 2. MM2でフルコンフォメーションサーチ。最安定構造を抽出
- 3. QM(PM6 or B3LYP or B2PTLYP)で構造最適化(真空中)
- 4. ボルツマン分布より存在比を計算

Level	Туре	Energy [a.u.]	∆E [kcal∕mol]	N(N1)/N(N3) [-]	Ratio [-]
DM6	N1-H1	0.10369	0.01	0.9812	49.5%
FWO	N3-H1	0.10367	0.00	-	50.5%
R31 VD/6-31C*	N1-H1	-654.95029	2.77	0.0094	0.9%
B3L1F/ 0-31G≁	N3-H1	-654.95470	0.00	-	99.1%
MD2/6-21C*//B2DIVD/6-31C*	N1-H1	-654.18211	2.99	0.0064	0.6%
MF2/0 310*// D2FEIF/0 310*	N3-H1	-654.18687	0.00	-	99.4%
B2PLYP/6-31G*	N1-H1	-653.47183	2.84	0.0083	0.8%
	N3-H1	-653.47635	0.00	_	99.2%

結果

- ・計算レベルによって存在比が異なるが、全レベルでN3-H1 typeが安定であると計算されている。
- ・PM6はN3,N1でエネルギー差が殆どなく1:1で存在と推算。
- ab initio計算ではいずれもN1-H1は殆ど存在しないと推算。
- ・エネルギー差が3 kcal/mol 離れてしまうだけで、存在比に大きく影響してしまう。
- ・量子化学計算の精度の問題(3 kcal/mol以下の精度を議論できるか)、測定溶媒等の影響(計算結 果は重空中でのもの。溶媒を考慮すればさらに精度が悪くなると考えられる。)



4. コンフォメーションを意識した手法(最適化なし)(手法2)

手順

- 1. MOEのlow mode MDで配座を発生(N1:670配座、N3:209配座)
- 2. MM(MMFF94s)とQM(PM6)で全ての配座に対してエネルギーを計算
- 3. 最安定配座のエネルギーより存在比を計算

結果

- ・MM計算でのエネルギーはN1とN3間で23kcal/mol程度開きがあり、信頼できないと考えられる。
- ・PM6は80%がN1と推算。
- ・MMFF94sでは、エネルギーの開きが大きいため存在比の計算ができないが、 総じてN3が安定であると推算。



4. コンフォメーションを意識した統計処理的な手法(最適化なし)(手法1)

Energyとして異性体中の最安定構造を採用した場合の結果

Level	Туре	Energy [kcal/mol]	∆E [kcal∕mol]	N(N1)/N(N3) [-]	Ratio [-]
MMFF94s 1SCF	N1-H1	40.58867	23.05	0.0000	0.0%
	N3-H1	17.53611	0.00	-	100.0%
PM6 1SCF (H.O.F.)	N1-H1	71.47418	-0.81	3.9477	79.8%
	N3-H1	72.2873	0.00		20.2%

N1、N3各タイプでのコンフォメーションにおけるエネルギー値の分散(縦軸は%で標準化)





5. コンフォメーションを意識した手法(最適化あり)(手法3)

手順

- 1. MOEのlow mode MDで配座を発生(N1:670配座、N3:209配座)
- 2. MM(MMFF94s)とQM(PM6)で全ての配座に対して構造最適化計算を実施
- 3. 最安定配座のエネルギーより存在比を計算

結果

・PM6での異性体の構造最適化計算の結果は、N1:N3 = 76:24 となり、
 実測結果を支持していると考えられる。

(実験系(溶液中)のIRでの結果は、N1:N3 = 65:35) 最適化なしの結果(N1:N3 = 80:10)より実測値へ近づいた。

- ・MM計算でのエネルギーは依然としてN1とN3間で平均10kcal/mol程度の開きがあり あまり信頼できないと考えられる。また、N3-H typeの方が安定と計算され、実測とは逆の結果。
- ・これらはあくまで真空中の結果であるので、正確に計算するためには、測定溶媒等の影響も考慮
 に入れる必要があると考えられるが、ラフなスクリーニングとして使うには充分だと考えている。

N1、N3の全配座の最安定構造(PM6)を初期構造として、 ab initio計算を行えば、結果は改善される!? (云わば、**PM6でのフルコンフォメーションサーチ**)



5. コンフォメーションを意識した統計処理的な手法(最適化あり)(手法3)

Energyとして異性体中の最安定構造を採用した場合の結果

Level	Туре	Energy [kcal/mol]	∆E [kcal∕mol]	N(N1)/N(N3) [-]	Ratio [-]
	N1-H1	25.843	8.97	0.0000	0.0%
MINIFF94S OP I	N3-H1	16.871	0.00	-	100.0%
PM6 OPT (H.O.F.)	N1-H1	63.97674	-0.69	3.2313	76.4%
	N3-H1	64.67128	0.00		23.6%

N1、N3各タイプでのコンフォメーションにおけるエネルギー値の分散(縦軸は%で標準化)





6. PM6でフルコンフォメーションサーチ→ab initio (手法3アドバンス)

手順

- 1. 手法3によりN1、N3の最安定構造(PM6)を計算(= PM6でフルコンフォメーションサーチ) (N1については211番目、N3については57番目の配座が最安定であった。)
- 2. QM(B3LYP or B2PTLYP)で構造最適化(真空中)
- 3. ボルツマン分布より存在比を計算

Level	Type	Energy [a.u.]	∆E [kcal∕mol]	N(N1)/N(N3) [-]	Ratio [-]
DM6(毛注3の結里)	N1-H1	0.10195	-0.69	3.2313	76.4%
FW0(于从30)和未)	N3-H1	0.10306	0.00	-	23.6%
B31 VD/6-31C *	N1-H1	-654.95215	1.56	0.0713	6.7%
DSLIF/0 SIG*	N3-H1	-654.95464	0.00	-	93.3%
MP2/6-31G*//B2PLYP/6-31G*	N1-H1	-654.18428	1.60	0.0669	6.3%
	N3-H1	-654.18684	0.00	-	93.7%
B2PLYP/6-31G*	N1-H1	-653.47418	1.34	0.1045	9.5%
	N3-H1	-653.47631	0.00		90.5%

結果

・PM6での最安定配座を初期構造として、DFT計算を行った結果、N1-HとN3-H間でのエネルギー差は手法1より小さくなったが、依然N3が安定と計算され、実測とは逆の結果となっている。

・MP2、B2PLYP(B3LYP + MP2)での計算結果も概ね、B3LYPの結果と同じであった。

・本手法では実験結果を支持する結果が得られなかった。



7. 計算時間(PM6構造最適化計算)

PM6 構造最適化(EF PRECISE)

ソルバ: MOPAC2009 (アカデミックフリー) <u>http://openmopac.net/MOPAC2009.html</u> ※PM6 はGaussian09でも計算できます。

マシン: Intel(R) Core(TM)2 Quad CPU Q6600 @ 2.40GHz

計算時間:

	N1-H1	N3-H1	合計
合計(1コア使用時)	8386 秒 (2.3 時間)	3622 秒 (1.0 時間)	12008 秒 (3.3 時間)
平均(1コア使用時)	12.52 秒	17.33 秒	

8. まとめ

・オーソドックスな方法(N1, N3の構造最適化によるエネルギーを比較)では、ab initio の結果でも、実測値を再現できなかった。

・それぞれの配座(N1:670配座、N3:209配座)に対して、構造最適化を実施しながらエネルギーの平 均値を計算した結果、PM6法で、実測値を再現する結果となった。(ただし、これは真空中での構造 最適化計算であり、測定溶媒等の影響は考慮されていない。)

- ・PM6でラフスクリーニングができる可能性を示していると考えられる。
- ・ab initio計算では、1000~1万倍の計算時間が必要であると考えられるため、 計算コスト的に不利であると考えられる。
- ・PM6での最安定配座→ab initioの計算では、実験結果が支持できなかった。



トータル計算時間

普通のデスクトップ1台で担当者が計算した概算時間 ※第四段階は最安定エネルギーから1kcal/molの配座を選択

- 第一段階(構造構築, ISIS Draw)
- 第二段階(配座探索, MOE)
 - まず、水素付加、MMレベルの構造最適化 30sec
 - 次に配座探索(LowModeMD)を実施- <5min
- 第三段階(semi emprical計算)
 - semi empricalの構造最適化を実施 <5min
- 第四段階(DFT計算, Gaussian09)
 - 全41配座のDFTレベルの構造最適化計算(低精度:B3LYP/6-31G*)
 - 1配座にかかる計算は1hour
 - 全41配座のDFTレベルのエネルギー計算(高精度:B3LYP/6-311+G**)
 - 1配座にかかる計算は1hour



テスト(2)の現状

- 今回の計算
 - MM2フルコンフォメーションサーチ→最安定選択→abinitio(手法1)NG
 - PM6フルコンフォメーションサーチ→最安定で比較(手法3) OK
 - PM6フルコンフォメーションサーチ→最安定選択→ab initio(手法3AD) NG
- 議論点
 - 測定溶媒の効果
 - 手法1と手法3ADで、ab initio時のエネルギー差が縮まっているので、
 ab initioは初期構造にかなり依存するので、難しい。けれども、全配座ab initio計算するのは時間的に大変なので、GPGPU QMが使えるかも
 - 全配座のPM6は意外と使えるかもしれない。
- 将来に向けて
 - 配座発生の方法を検討中
 - 全配座ab initioを実施中



某社担当者のコメント

ブラインドテストを実施した某社からのコメント

- 配座探索アルゴリズムだけで最安定配座を絞りこんだり、半経験的分子軌道法では最安定配座を探索すると失敗する。むしろ、配座探索では可能性のある多数の配座を発生させるに留め、ab initioで最安定(+α)の配座を探すことが大切である。
- 化合物構造の柔軟性が高かったり、Tautomerがある場合には、可能性のある配座が多数になり、自社の計算リソースに与える負荷が高くなる。XA社のGPGPUQMソリューションは費用対効果に優れており、VCDによる構造決定には有効であると考えている。



GPGPU QMソリューション

- 弊社と名大の共同開発のプログラム
 XA-CHEM-SUITE : XA-CUDA-QM
- テラヘルツの基準振動解析、光毒性予測のためのTDDFT(HOMO-LUMO Gap)、VCDいずれも 多量の量子化学計算を伴う。
- HF, DFTがマルチコアCPUに比して3~4倍高速
- 現状、GAMESSまたはGaussianにアドオン可能
- 価格対効果は3倍



balloon による 配座 探索

- 高速というよりもコストがかからない方法
- 有償のものを含めていろいろあるが、今後は MOEがなくても使えるように、フリーで使える balloonとの組み合わせを検討
 - MOPACのPM6やGAMESS/Fireflyなどを組み合わせ れば完全にフリーになる(vcdはGaussian09のみ)
 - 100個の配座を生成するコマンド例

balloon -c 100 --randomSeed 51277 --output-file 3D.sdf -o sdf -input-file 2D.smi --noGA



光毒性予測/VCD評価システム

Winmostar + MF Amber



Gaussian09 B.01



MD/ER + QM(freq/vcd, tddft)

- 京大版ERソースコードはGPLで3月末公開予定
- プリビルド計算サーバ販売予定
 - GUIから溶質、溶媒、力場を決めれば計算可能
 弊社がー次サポート
 - 研究の議論はermod_user(アカデミックML)に代理投稿、もしくは松林研の許可を得てermod_userに参加
 - GPUでQM + MD(Amber / Gromacs)が加速

